

1月第3週の礼拝説教

- 日 時：2026年1月18日（日）10：30～11：30 降誕節第4主日礼拝
- 説 教：保科けい子牧師
- 聖 書：新約：マルコによる福音書1章14～20節（新約P61～62）
- 説教題：「わたしについて来なさい」
- 讃美歌：55（人となりたる 神のことば、）
516（主の招く声が 聞こえてくる。）

昨日1月17日は、30年以上前に阪神大震災が起きた日でした。非常に大きな地震だったので、神戸の街が火事になりたくさんの被災者が出てことを覚えています。最初に夫が赴任したのは西宮にある関西学院教会でしたので、そこに連絡をして確認をしましたら、西宮もかなり被災された方が多いと聞きました。電車が神戸の近くまで行くようになってすぐに、夫が西宮まで訪ねて行き、それから神戸の方にも足を伸ばして被災状況を見てきました。関西学院教会員の中でも、家が潰れてしまったり、あるいはかなり大きな被害を受けた方がおられました。私どもが最初に借りて住んだ家も古い建物だったので、壊れてしまい更地にされていたようです。その時からでしょうか。被災された方々を様々な形で支援するボランティアという概念が日本の社会の中に根付き、その年はボランティア元年と言われるようになった気がいたします。その当時、東京教区の西支区に関西学院大学出身の牧師がおられ、その方を中心に青年たちでグループを組んで、神戸の三宮近辺に支援を行っていたと思います。そのようなことを思いながら、私はかつて仙台におりましたので、東日本大震災のことも考えさせられています。

さて、本日の聖書箇所は普通は「四人の漁師を弟子にする」という一つのかたまりで選ばれることが多いところです。けれども、今日はその前の「ガリラヤで伝道を始める」という箇所から取り上げています。このガリラヤという地域は、ガリラヤ湖という湖を中心となっている、聖書の中では特別な意味があるところです。マタイによる福音書4章15節ではイザヤ書（8章13節）を引用して「異邦人のガリラヤ」と記しています。そのガリラヤに主イエスの公生涯の出発点があり、主イエスは「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と「神の福音を宣べ伝え」始めたのです。この主イエスのメッセージは、1章4節に記されている洗礼者ヨハネの「罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた」と共通するところがあります。しかし、ヨハネの活動の結果と主イエスの活動の結果とは全く違っていたようです。ヨハネが荒れ野で活動を開始すると、5節にあるように、「ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた」のです。ところが、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と神の福音を宣べ伝え始めた主イエスのところには、人々は押し寄せて来ませんでした。16節には「イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき」と記されていますが、これは一人で歩いておられたと思われます。主イエスのもとには誰もやって来なかつた、と言ってもよいかもしれません。しかし、そのような中で、主イエスのメッセージを受け止め、主イエスに従って弟子となった四人のことが、18節から20節で語られています。たった四人ですが、主イエスの招きの言葉に応答して弟子となり、従って行つたのです。主イエスを信じて従っていく人々の群れ、つまり後に教会となつていった群れは、このようにして始まったのです。

16節を元の言葉で見ますと、「イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき」の「歩いて」と「シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった」の「網を打っている」には動詞の現在形の分詞が使われています。そのことから、今このときもなお、主イエスが、言い換えれば、主イエスの生前の約束によって遣わされた聖霊が、私たちの近くを歩いておられ、そして、私たち一人ひとりのこの世における歩みをご

覧になっていてくださるのだ、と読むこともできるのです。

続けて、17節にまいります。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう。」と主イエスはお語りになりました。マタイによる福音書4章19節も「イエスは、『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう』と言われた。」と全く同じ言葉で記されています。もともと、福音書はマルコによる福音書が最初にまとめられていましたから、マタイによる福音書もルカによる福音書もマルコによる福音書を参考にしている記事が多いのです。ですから、マタイによる福音書においてもマルコによる福音書においても、主イエスが「わたしについて来なさい。」、丁寧に言うならば、「わたしの後について来なさい。」とおっしゃったと記されているのも不思議ではないのです。原文の順序に従って訳すならば、「来なさい（あるいは「おいで」）、わたしの後ろに（あるいは「あとに」）」となります。つまり主イエスはここで、「来なさい」「おいで」と招いておられるのです。それは、聖餐式の時に時々読んでいるマタイによる福音書11章28節の主イエスのお言葉、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」の中の「わたしのもとに来なさい。」と同じ言葉です。その招きに応えて主イエスのところに行った者は、主イエスの後ろを、その後（あと）について歩んでいくのです。しかし、それに続く「人間をとる漁師にしよう。」については、マルコによる福音書の元の言葉はマタイによる福音書とは少し違います。マルコによる福音書の言葉は、「そうすれば、私があなたがたを人間をとる漁師になるようにしよう。」とおっしゃったのです。「なるように」という言葉がはいっているのです。「なるように」という言葉は、新約聖書中では、「少なくともその形では存在しなかったものが存在するようになる」という意味で用いられる大切な言葉です。そうしますと、もともと漁師であったシモンとシモンの兄弟アンデレに、たとえその漁の目的が「人間をとる」ことであっても、「漁師になるようにしよう」と語られたところにマルコによる福音書独自の意味を考えることができます。

私には、マルコによる福音書のこの箇所を読むときに思い出すことがあります。すでに亡くなられましたが、高橋たか子という作家がいます。夫は小説家で中国文学者の高橋和巳です。この方は、作家の遠藤周作や井上洋治神父の影響を受け、夫の死後にカトリックの洗礼を受けました。その後パリに行かれて、パリの街中で小さな部屋を一人一人が借りて都市の中で観想修道をするというエルサレム修道会と関りを持たれます。そしてある時、彼女も正式に修道女になろうという請願を立てようとします。その時に、指導司祭に修道を志願するにはどうしたらよいか、と相談します。彼女の自伝的な著書『私の通った道』に、ご自身のそういう体験が書かれています。その時に、相談にのった司祭はこのマルコによる福音書の「四人の漁師を弟子にする」という箇所を語ります。そして、「修道を志願するのに何も条件などはありません。無条件で」とおっしゃったようです。「無条件で主イエスについていく。ただそれだけです」とおっしゃったのです。それがいわば修道の姿であるということを言われたのだと思います。私自身、この聖書箇所を読むときに、そのことをいつも思われます。また、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」というみ言葉によって、牧師になったという方がかなりおられるということをよく聞きます。

18節には、「二人はすぐに網を捨てて従った。」とあります。「すぐに」という言葉は、マルコによる福音書に数多く用いられている重要な言葉です。二人の漁師のこれまでの人生を象徴する「網」を即座に捨て去らせるほどの大きな力がこの出来事に働いている、そして二人は躊躇う間もなく主イエス・キリストに従う者へと大きく向きを変えられた、そのことが「すぐに」という一言で語り尽くされているのです。それは、直前の15節後半に記されている「悔い改めて（言い換えれば、主イエスのほうに向きを変えてということです）福音を信じなさい」という主イエスのみ言葉が、シモンとシモンの兄弟アンデレによって確かに聴かれ、現実のものとなったと言えるかもしれません。そういうわけで、ここでは、み言葉を聞きそれをすぐに信じる者の歩む道が、私たちの前に具体的に開かれてい

るのです。

19節、20節は、舟の中で網の手入れをしているゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとの出会いに場面が移ります。ここで注目したいのは、ヤコブとヨハネについては「この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。」と記されていることです。今で言えば、舟を所有して漁業をしている社会的な立場のある人たちだった、ということになるでしょう。ですから、20節で「すぐに」と表現されているのは、主イエスが「すぐに彼らをお呼びになった」のであって、彼ら二人が「すぐに従った」のではないと、マルコによる福音書は注意深くその姿勢を描き分けています。二人が後ろを振り向きたい思いで主イエスの後について行ったということを、マルコによる福音書は「父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して」と表現しているのかもしれません。そのように考えると、後になって、主イエスがご自身の死と復活を弟子たちに予告なさった直後に、彼ら二人が、「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座させてください。」(マルコによる福音書10章37節)と願っていることも納得のいくところです。そういう点から言えば、「すぐに網を捨てて従った」と記されるシモンとアンデレは、湖のほとりを歩いておられた主イエスが声をかけるとすぐに返事ができるぐらいのところの湖の岸辺から、小さな投げ網を打っていた漁師だったので、自らの生活の手段である網をなげ捨て自らの退路を断って主イエスについて行くことができたのかもしれません。しかし、いずれにせよ、4人の漁師は「わたしについて来なさい」という呼びかけに応えて、主イエスの後について行きました。そこで、20節に大切な言葉があります。それは、「すぐに彼らをお呼びになった。」と表現されているなかの「お呼びになった」という言葉です。ここで用いられている「呼ぶ」という言葉と教会を現すギリシャ語の「エクレシア」の動詞形の「集める」とは関連があると言われています。そのことを考えると、二組の兄弟が主イエスに従っていったその有様は多少異なりますが、それこそが主イエスが私たち一人ひとりを様々な形でお呼びになるあり方であると考えることができます。私たちは今日も、一人ひとりが主イエスから呼び出され集められて、ここにいます。そして、まさに今、ここに教会があります。その事実こそが、主イエスの「わたしについて来なさい」という招きの言葉が、今なお響いている確かな救いの出来事なのです。

お祈りをします。

主なる神様、

次第に寒い冬になってきました。今日も私たちはこの場に集められて寒い中で礼拝をささげています。しかし、様々な所用のために日曜日も忙しく過ごさなければならない方々もいます。そのような中にあって、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」という主イエスの招きの言葉を本当に深く受け止める者として、私たち一人ひとりを力づけてください。今日、ここに様々な事情のために集い得なかったお一人お一人の上にも、あなたの豊かな導きと支えがありますように。この祈りを主イエス・キリストのみ名によってささげます。アーメン。